

秋の訪れ

奄美市立笠利小学校 六年 伊瀬知 唯

「ふう。」

ネリヤの森のコノハズク村長は、ため息をつきながら大粒の汗をごしごしとふきました。

「今日はネリヤ祭だというのに、サシバの三羽はまだやってこない。おそいなあ。」

ここネリヤの森では、昔からネリヤ祭の日にサシバが三羽そろい、鳴き声をあげて森を一周すると秋がやってくると言われていきます。

しかし、今日もネリヤの森は、太陽がジリジリと照りつけ、むしむしとした空気が辺り一面にただよっています。そのころ、

「おそいなあ。バアくんどうしたんだろう。」

ネリヤの森のシンボル、大きなガジュマルの木の上で、サシバのサアちゃんとシイくんが話をしています。約束の時間になっても、もう一羽のバアくんがやってこないのです。

「約束を忘れちゃったのかな。」

二羽は、バアくんを探しに行くことにしました。しばらく歩くと、甘いにおりがふわっとただよってきました。

「いいにおい。そういえばおなかペッコペコ。」

においにつられて歩いていくと、ルリカケスのルリおばさんのパン屋が見えてきました。

「いらっしやい。サシバのお二人さん。」

中へ入ると、ルリおばさんが優しく声をかけてくれました。店の中には、しいの実やハイビスカスの花、パッションフルーツなどの果物がいっぱいあった。パンがならんでいます。

「ネリヤパン、三つください。」

そう言って、サアちゃんとシイくんは、ルリおばさんに三ネリヤ分の貝がらをわたしました。三つ目のパンは、もちろんバアくんの分です。ふつくと焼きあがったばかりのネリヤパンは、黒砂糖がたっぷりとかかかっていて、大きなマンゴーやリュウキュウイチゴがゴロゴロと上にのっています。「バアくん、喜んでくれるといいなあ。」バアくんの喜ぶ顔が頭に浮かび、自然と笑顔がこぼれました。

パン屋を出ると、ピーピー、ピョピョピョとかわいい小鳥のさえずりが聞こえてきました。見上げると、おしやべり好きなアカヒゲたちが集まって、ルリおばさんのパンとハイビスカスティーで、お茶会をしています。

「アカヒゲさん、こんにちは。サシバのバアくんのおうちを教えてください。」

すると、アカヒゲのあっちゃんか、

「バアさんの家は、森の中のツリーハウスよ。今、バアくんはかぜをひいて寝ているわ。」

バアさんの家までの地図を、大きなクワズイモの葉っぱに書きながら教えてくれました。

二羽はアカヒゲたちにお礼を言うと、すぐに飛び立ちました。地図を見ながら行くと、バアさんの家はすぐに見つかりました。

「着いたあ。バアくん、具合大丈夫かな。」

深呼吸をして、二羽はドアの前に立ちました。コンコン。バアさんの家の大きなドアを小さな手でやさしくたたきました。

「はあい。」

バアさんのお母さんの声が出て、ドアが開きました。家の中では、顔色の悪いバアくんがコンコンとせきこんで、ベッドの上でぐったりしています。サアちゃんたちはバアくんに、ネリヤパンが入った袋をわたしました。

「このパンと一緒に食べよう。パンは焼きたてだから、すっごくおいしいよ。」

甘くてこんがり焼けたにおいが部屋いっぱい広がりました。三羽はそのにおいにつられるようにパンを口にしました。もぐもぐもぐ。口の中が、とろけるようなマンゴーや黒砂糖の優しい甘さでいっぱいになりま

した。

「このパン、ぼくの大好きなリユウキュウイチゴが入ってる。すっごくおいしいよ。」

バアくんが、うれしそうに目を細めて言いました。パンを口にほおぼっていると、バアさんの目はどんどん元気になっていきました。パンを食べ終わると、バアくんはベットからすくっと起き上がり言いました。

「なんだか元気がわいてきた。今なら、みんなと空を飛び回ることもできそうだよ。」

その明るい声からは、さつきまでの苦しそうな姿はどこにもありません。三羽はニツコリと顔を見合わせ、青い空へと飛び立ちました。そして、大きく羽をふり、ネリヤの森を並んで大きな声で鳴きながら一周しました。

すると、むしむしと暑かった風は涼しくなり、ギリギリと照りつけていた太陽の日差しは優しくなりました。さわさわさわ。ざわわわわ。耳をすますと、空に向かつてせのびしているように大きくのびたサトウキビが、風にゆられてさわやかな音を奏でています。

ふわん。涼しい秋の風を感じたコノハズク村長は、外に出ました。

「ピククイー、ピククイー。」

空高く、三羽のサシバが森いっぱい聞こえる鳴き声をあげて飛んでいます。

「ネリヤの森に、秋がやってきたぞ。さあ、ネリヤ祭の
始まりじゃ、コホッ。」

コノハズク村長は、目を輝かせて言いました。